

第1回 新庄新高校（仮称）・新庄神室産業高校 教育基本計画策定委員会  
記録（概要）

- 1 日時 令和3年5月31日（月）10：30～12：00
- 2 会場 県庁1002会議室
- 3 参加者 委員長（座長）、委員10名、事務局5名
- 4 内容

- 1 委嘱状の交付
- 2 県教育委員会あいさつ
- 3 委員の紹介
- 4 報告
  - (1) 最上地区の県立高校再編整備計画（第2次計画）について
- 5 協議
  - (1) 教育基本計画策定委員会の検討組織（案）
  - (2) 教育基本計画策定委員会の検討内容（案）
  - (3) 教育基本計画策定委員会の検討計画（案）
- 6 意見交換
- 7 連絡
  - (1) 次回の開催について
  - (2) その他

5 発言要旨

4 報告 事務局長より説明

- (1) 最上地区の県立高校再編整備計画（第2次計画）について  
質問等なし。

5 協議 事務局長より提案

- (1) 教育基本計画策定委員会の検討組織（案）  
質問意見等なし。原案の通り承認された。

- (2) 教育基本計画策定委員会の検討内容（案）  
質問意見等なし。原案の通り承認された。

- (3) 教育基本計画策定委員会の検討計画（案）  
質問意見等なし。原案の通り承認された。

6 意見交換

（委員）

新庄新高校（仮称）では、生徒の多様な進路希望の達成のために、生徒の学力に応じた探究コース以外のコースの設置やクラス分けなどの配慮が必要だ。

新庄神室産業高校では、地域産業を先導している方々を授業の講師として招くような仕組みづくりができないか。直接、教壇に立つことで、子どもたちに刺激を与える

とともに、地元企業を知る機会にもなる。また、新庄市には全国から注目されている企業もあるが、社員募集をしても応募がないという声や、建築会社の社長からは土木関係の科がなくなったこともあり、社員募集にも苦慮しているといった声も聞く。もっと現場の声に耳を傾けながら、地域の事情を考え、課題を解決することが可能となるカリキュラムづくりが必要ではないか。

(委員)

以前より新庄市では、地元企業の周知を図るために、中学生に対しては企業の方々が中学校に出向き説明し、高校生に対してはバスツアーの形で企業見学を実施するとともに、高校の先生方が地元の企業の理解を深めるため、手分けして企業を回り、社長からの話を伺うなどしていた。今後も、先生は企業を知り、企業の物語を地域のひとつの物語として、子どもたちに教えてほしい。

同じ目的を持つ仲間と過ごす高校3年間は、心のふるさとづくりになっていくと考えており、人口減少によって労働力が減少する中で、地元教育を大切にし、郷土で活躍する若者が増えることを期待する。

また、定時制について「現在の新庄南高校の校舎を必要な改修を施した上で、令和9年度から全日制と校舎を共用しない独立校舎として使用する。」としており、今後の定時制における独立校舎の在り方について関心を持っている。

(委員)

中学校と高校の連携事業を十数年行っている。その中で地元の高校に送り出した生徒の状況や定員割れとなる高校の対応として、高校の魅力の発信が必要であると中学校の校長先生たちと話をしているところだ。11月に小学校、中学校、高校の校長先生が一堂に会し研修を行うがその際、新庄神室産業高校の校長先生から学校の様子について説明してもらおう予定である。小学校教員も含め大人が地元の高校を知ること、何ができるのかを検討していきたい。新幹線やスクールバス等で山形や庄内に通えてしまうため、高校段階で地元から離れる生徒もいる。中学生に、高校生の活躍する姿を見せる機会をつくるとともに、学校で学ぶ内容を高校生自身から直接中学生に語る場の設定が必要だ。新庄北高校であれば探究学習の様子、新庄南高校であれば総合ビジネス科の商業活動の様子、新庄神室産業高校であれば小学生の田植えに参加して指導してもらおうなど、活動する高校生の姿を見せてほしい。最上地区のニーズに応えた魅力ある高校再編整備とするためにも、各高校から魅力や学ぶ内容を発信してもらい、中学生自らが新庄市の高校を選択するような手助けをしていきたい。

(委員)

自分の学校のことを中学校や生徒・保護者に、いかに情報発信できるかということが重要だと感じているが、なかなか伝えきれていないのが現状である。学校全体として中学校と連携を深めることが、高校の魅力を地域に発信することになる。また、生徒の学力差の拡大は、非常に大きな問題として捉えており、しっかりイメージを膨らませながら、対応等の検討を進める必要がある。

新庄北高校は普通科高校であり、他校と比べ進学意識が比較的強く、地元企業との結びつきが少ないという歴史があったが、昨今探究的な学びによって自治体を含めた地元新庄市の関連企業に協力を得ながら地域に開かれた学校づくりが進んでおり、地元教育を意識した学びを、今後も継続できるように考えていきたい。

また、定時制の校舎移転は大きな変更であり、心配や不安の声が届いており、今後

議論しながら進めていきたい。

(委員)

新庄南高校は 107 年の歴史の中で、普通科・家政科・商業科の 6 クラスの時代から始まり、現在は普通科 2 クラス・総合ビジネス科 1 クラスの 3 クラスの規模となっている。大勢の競争の中で切磋琢磨し、伸びる生徒もいるが、比較的規模が小さい環境の中でも少人数で手厚く教えれば、驚くほど伸びる生徒もおり、そのような生徒が多く在籍するのが新庄南高校である。普通科と商業科が設置されている高校は県内でも珍しく、その中で、普通科と商業科から国公立大学に一般入試で合格する生徒や、地元へ貢献する割合の高い看護医療系に進学する生徒、公務員として地元に残る生徒など、多様な進路の中で生徒を育てている。

芸術にも力を入れており、カリキュラムには音楽・美術・書道の科目を設置するとともに、部活動では書道部・美術部が全国大会に出場し、その活躍を地域の人に披露することや、昨年度も新庄まつりが中止になった際のイベント企画、図書委員会を中心に長い間継続してきた新庄市の図書館での読み聞かせボランティアなど、地域と密接した教育活動を展開してきた。

新庄新高校（仮称）においても、これまでと同様に地域と連携した教育活動を継続するとともに、新しい学科に関しても、地域に関する学科の設置も考えられるのではないかと。新南ブランドと言われてきた就職から進学までの幅広い進路実現を可能とし、地域に対して愛着心をもつ生徒を育成する学校づくりをしていきたい。

(委員)

時代のニーズを考えても単にモノづくりという時代ではないため、新庄神室産業高校は、商業科新設で 3 学科となることを一つの起爆剤と捉え、視点を広げステップアップする大きなチャンスと考える。

新庄神室産業高校の今年度の定員充足は最上地区の中学生の生徒数の減少に大きく影響を受け、5 割台となった。また、最上地区に限ったことではないが普通科志向が相変わらず強いことも逆風になっていると感じる。その状況下においても、新庄神室産業高校は地域を担う人材づくりを頑張っているが、なかなか現状を打破できなくて悔しい思いをしている。中学校の進路指導の先生や保護者に、新庄神室産業高校の学校生活や学習の様子を知ってもらい、学校の価値と必要性を認めて応援してもらえよう学校づくりをしていきたい。

地元を担い地域をつくることへのやりがいを小学生や中学生の頃から芽生えさせる仕掛けづくりを行うとともに、産業界や行政の方々との関りを深めながら心のふるさと作りが可能なカリキュラムを編成し、学校の魅力アップを図っていきたい。専門学科での学びの魅力を発信し、より多くの中学生にとって選択肢となるような学校づくりをしていきたい。

(委員)

最上地区の中学校卒業生は、今後も減少が続くと思われる。この生徒数の減少は、最上地区だけでなく全国で直面する問題であり、山形大学も 2040 年には学生数が、今の 7 割になると見込まれている。最上地区が課題を先取りする形になり、課題への取り組みが先行事例となる。つまり、新しい高校は課題先進校となり、いかに活力を保ちながら未来を描き、地域でどのような役割を果たすかが問われる。

地元の要望や学校の思いもあるが、学校を担うのは生徒であることを第一に考えた

検討が必要だ。当事者である生徒が学校のカリキュラムのどこに満足し、さらに勉強したいことは何かなどの情報を、課題やポイントを考えるための材料として学校づくりを進めていきたい。

魅力は発信しないと伝わらない。情報を発信すると、発信した人に情報は集まる。このため、発信することによって多様な広がり生まれる。また、生徒自身の声や学校の魅力を、完成してから発信するより、作りながら新しい方向などを発信する方が、学校づくりにおいて効果的である。山形大学の学生もパンフレットはほとんどウェブサイト上で見ており、紙媒体のパンフレットを見ている学生は少ないため、中学生も同様に、ウェブサイト上の情報に対する感度が高い。ウェブサイト上での活動を通して、今あるものを丁寧に発信し、その都度、中学生や保護者の反応を踏まえながら学校の魅力をつくるのが大事である。

## 7 連絡

### (2) その他

#### (委員)

本委員会設置の前提となる最上地区の県立高校再編整備計画には、最上地区の3町にある分校に関する再編も含まれており、新庄市内では、本委員会で議論される高校が話題となるが、3町では、分校についての扱いが大きな話題となっている。

新庄北高校、新庄南高校、新庄神室産業高校の3校は、それぞれ最上町、金山町、真室川町に分校を持っており、町の首長や教育長と連携をしている。新庄市内の3校の再編整備と3分校は密接な関りがあるため、本校と分校はセットであるという観点が必要である。

新庄新高校（仮称）が新庄北高校の敷地・校舎を活用することから、新庄市では本来の対等合併ではなく、新庄南高校が新庄北高校に吸収されるという認識を持つ人もいる。また、3町では、分校の在り方について大変興味深く注視しているようだ。